

〔論 文〕

黄庭堅の「松風閣」詩について

——史官経験者の文学作品の史料的人格の分析——

陳

力

張衡の「兩京賦」・班固の「兩都賦」は、中国古代文学史における重要な作品である。これらの文学作品の著者はいずれも史学と関係がある。張衡は大史令であり、班固は蘭台令史で『漢書』を書いた。このような史学と密接な関係のある士大夫が書いた当時の都城に関する作品はどのような史料的人格があるのか、筆者は強い関心をもっている。

しかし、漢代の都城関係の文学作品をチェックできるほかの史料が少なく、これらの作品の史料的人格を確認しにくい。唐代以後のこのような作品であれば、都市の細部までの記録が残っているので、その史料的人格を考察しやすい。このため、本文は宋代詩人・書家の黄庭堅(1045-1105)の詩である「松風閣」を選び、史官経験者の文学作品の史料的人格の一角を分析したい。

「松風閣」は柏梁体の七古で、『山谷詩集注』(以下『集注』と略称する)第十七卷に収録され、『集注』での名称は「武昌松風閣」(武昌は現代の中国湖北省鄂州市)である。黄庭堅の真筆である「松風閣詩卷」という書道作品があり、現在台湾故宫博物院に所蔵されている。この書道作品において、この詩の題は「松風閣」(以下、本文はこの詩を「松風閣」詩と称する)と書かれている。「松風閣」詩の内容は以下である

依山築閣見平川，夜闌箕斗插屋椽，
我来名之意適然。老松魁梧数百年，
斧斤所赦今参天，風鳴媧皇五十弦，
洗耳不須菩薩泉。嘉二三子甚好賢，
力貧買酒醉此筵，夜雨鳴廊到曉懸，
相看不歸臥僧毡。泉枯石燥復潺湲，
山川光輝為我妍，野僧早(早)飢不能饅，

曉見寒溪有飲煙。東坡道人已沉泉，
張侯何時到眼前。釣台驚濤可昼眠，
怡亭看篆蛟龍纏。安得此身脫拘牽，
舟載諸友長周旋。

I 黄庭堅の略歴

黄庭堅は号が山谷道人，世に「黄太史」と呼ばれていた。『宋史』四四四列伝第二百三文苑六に、

黄庭堅字魯直，洪州分寧人(今江西省九江市修水縣)。(中略)哲宗立，召為校書郎，『神宗實錄』檢討官。逾年，遷著作佐郎，加集賢校理。『實錄』成，擢起居舍人。(中略)服除，為秘書丞，提点明道宮，兼国史編修官。紹聖初，出知宣州，改鄂州。章惇・蔡卞与其党論『實錄』多誣，俾前史官分居畿邑以待問，(中略)貶涪州別駕，黔州安置，言者猶以処善地為劾法。以親嫌，遂移戎州，(中略)。

徽宗即位，起監鄂州稅，簽書寧国軍判官，知舒州，以吏部員外郎召，皆辭不行。丐郡，得知太平州，至之九日罷，主管玉隆觀。庭堅在河北与趙挺之有微隙，挺之執政，轉運判官陳举承風旨，上其所作「荆南承天院記」，指為幸災，復除名，羈管宜州。三年，徙永州，未聞命而卒，年六十一。

庭堅學問文章，天成性得，(中略)善行・草書。楷法亦自成一家。与張耒・晁補之・秦觀俱遊蘇軾門，天下稱為四學士，而庭堅於文章尤長於詩，蜀・江西君子以庭堅配軾，故称「蘇，黄」。(中略)初，游瀟皖山谷寺・石牛洞，樂其林泉之勝，因自号山谷道人云。
とある。黄庭堅は『神宗實錄』の編纂に携わり、

その後は政争に陥り、紹聖元年(1094年)十二月涪州別駕に貶められ、黔州(今の重慶市彭水・黔江区の周辺)に流された。その後、更に戎州(今の四川省宜賓市)に移された。徽宗が即位した後、徽宗の母の向太后が政事を握った。向氏皇太后は新党を憎み、辺地に流された旧党を次々と復帰させた。黄庭堅もこの時に召還されたが、建中靖国元年になると、徽宗が親政して新党を起用し、黄庭堅が再度追放された。崇寧元年(1102年)六月、黄庭堅は太平州の長官職を拝領したが、着任して僅か九日間で罷免され、崇寧元年九月からしばらく鄂州で閑居したが、崇寧二年(1103年)十一月に宜州に貶められ、崇寧四年(1105年)に逝去した。

Ⅱ 「松風閣」詩について

長江南岸に位置する鄂州と長江北岸の黄州は蘇軾一門とかなり縁のあるところである。黄庭堅が鄂州で閑居する前、蘇軾と張耒はいずれも鄂・黄二州で謫居か任官されたことがある。松風閣が所在する鄂州西山についても、複数回蘇軾・張耒・黄庭堅の詩に登場していた。蘇軾は黄州に貶められた時武昌西山を訪れた。その「武昌西山」詩は、

嘉祐中、翰林学士丞旨鄧公聖求為武昌令，常游寒溪西山，山中人能言之。軾謫居黄冈，与武昌相望，亦常往来溪山間。元祐元年十一月二十九(1087年1月6日)，考試館職，与聖求会宿玉堂，偶話旧事。聖求嘗作「元次山窪尊銘」刻之岩石，因為此詩，請聖求同賦，当以遺邑人，使刻之銘側。

春江淥漲蒲萄醅，武昌官柳知誰栽。
憶從樊口載春酒，步上西山尋野梅。
西山一上十五里，風駕兩腋飛崔嵬。
同游困臥九曲嶺，褰衣獨到吳王台。
中原北望在何許，但見落日低黃埃。
歸來解劍亭前路，蒼崖半入雲濤堆。
浪翁醉处今尚在，石白杯飲無樽罍。
爾來古意誰復嗣，公有妙語留山隈。
至今好事除草棘，常恐野火烧蒼苔。

当時相望不可見，玉堂正对金鑾開。
豈知白首同夜直，臥看椽燭高花摧。
江辺曉夢忽驚斷，銅環玉鎖鳴春雷。
山人帳空猿鶴怨，江湖水生鴻雁來。
請公作詩寄父老，往和万壑松風哀。

とあり、すでに「松風」の言葉で西山の景色を詠っていた。黄庭堅は蘇軾のこの詩に唱和し、「次韻子瞻武昌西山」を題とする詩を詠って、その詩に「万壑松声如在耳，意不及此文生哀」の句もあった。張耒も「次韻蘇公武昌西山」の詩に、次のように詠った、

靈均不醉楚人醅，秋蘭靡蕪堂下栽。
九江仙人棄家去，吳市不知身姓梅。
東坡先生送二子，一丘便欲藏崔嵬。
脫遺簪笏玩杖履，招揖魚鳥營池台。

とあり、「二子」の表現を使った。張耒は紹聖元年(1094年)に監黄州酒税に左遷されたことがあり、長江を渡って西山を遊覧し、「杉松鳴古刹，始覺此溪寒」と詠い、「松鳴」の表現を使った。このように文人仲間の応酬唱和のなか、鄂州に左遷された黄庭堅が事前に鄂州の山水名所についての一定の知識をもっていると考えられる。蘇軾と張耒が黄州・鄂州で作った旧友は黄庭堅の鄂州で順調に交友関係を作る前提条件だと考えられる。たとえば、邠老、つまり潘大臨はその一人である。潘大臨は元祐元年前後(1086年)、蘇軾が黄州に貶められたときの友人で、その後、張耒と黄庭堅と深い付き合いがあったのである。このような人脈があるために、鄂州到着早々、黄庭堅は「二三子」と一緒に西山や松風閣や釣台・怡亭などでの見物が実現できた。本文の最後で述べるが、「松風閣」詩はこのような集団・人脈の背景のもとで創作されたのであり、このことは看過してはいけなとおもう。

徽宗が親政してから、再三いわゆる元祐党人の著作の木版を破って廃棄する詔を出したが、蘇軾らの詩文は依然士大夫の間に密かに伝わっていた。特に黄庭堅が真筆の「松風閣詩卷」は後に「天下第九行書」の書道作品とされ、当時は蔡京のような高官に所蔵されていた¹⁾。

この「松風閣」詩は崇寧元年に鄂州で創作されたといわれている。さらにこの詩は黄庭堅がいわゆる松風閣という建物に泊まる夜に創作されたと考える研究者が複数いる²⁾。これらの観点はいずれも任淵の『集注』巻十七にある「武昌松風閣」、山谷九月至鄂、此詩経途所作。時張文潜再謫黃州、猶未至也、故詩有「張侯何時到眼前」之句。黄与武昌隔江相望、今尺牘中有「跋与李德叟書」云、崇寧元年九月甲申、係舟樊口題」との注釈を間違っして解説した結果である。この注にある「崇寧元年九月甲申、係舟樊口題」は「与李德叟書」の跋を書いた時間だとおもう。

「松風閣」詩の創作時間について、鄭永暁氏・楚默氏・劉琰・楊曉萍などの研究者は慎重な態度を取っている。鄭永暁氏は崇寧元年作と考え、楚默氏は「この年の九月、山谷が武昌で松風閣を遊覧した後に書いた」と考え、甲申の日に創作したとは明言しなかったのである³⁾。

黄庭堅の孫である黄芾の『山谷年譜別集』（以下『黄譜』と略称する）巻二九の記載や任淵『山谷詩集注目錄年譜付』（以下『任譜』と略称する）引く黄庭堅「南樓寄方公悦序」に「某以元年九月至鄂」とあり、更に黄庭堅の詩に題が「庭堅以去歲九月至鄂、登南樓、嘆其製作之美、成長句、久欲寄遠、因循至今書呈公悦」となっている詩がある。黄庭堅は崇寧元年九月に鄂州に到着したことは間違いがないとおもうが、西山の見物は甲申の日（黄芾は甲申の日は九月十二日としている）と断定するのは些か性急ではないかとおもう。

台湾中央研究院『兩千年中西曆轉換』⁴⁾によれば、崇寧元年九月一日は癸未の日であり、故に甲申の日は初二であり、西曆1102年10月15日にあたる。『黄譜』は間違っして甲申の日を十二日とし、鄭永暁氏は『黄庭堅年譜新編』でそのまま引用したが⁵⁾、この年の九月十二日の干支は甲午なので、これは正しくないとおもう。「松風閣」詩に「張侯何時到眼前」の句がある。この「張侯」は前述した張耒のことである。張耒は字が文潜、同じ年に黄州に貶められた。この句からみれば、「松風閣」詩を創作したとき、黄庭堅

はまだ張耒と面会でできていないはずである。前引く『黄譜』巻二九に「今按『国史』、崇寧元年七月庚戌、主管亳州明道宮。張耒責授房州別駕黃州安置、而文潜謝表云、已於九月三日到黃州公参訖。」とあるが、張耒『張右史文集』巻四三「黃州安置謝表」に「準告責授房州別駕黃州安置、臣已於九月初二到黃州、公参訖。率情而動、盖縁不学之愚。議罪惟輕、上頼好生之德。伏念臣（中略）頃守汝陰、実名長吏、不能明義以自立、乃敢徇私而致哀、跡涉背公、事非考古。果不逃於正論、猶窃道於嚴誅。」とあり、時間に関する記載には「九月初二」と「九月三日」の差異があり、これは恐らく伝写のなかの誤りである。いずれにせよ、黄庭堅と張耒は崇寧元年九月の初めにそれぞれ鄂州と黄州に到着したのである。鄂州と黄州の間は長江があり、距離はそれほどないが、彼らはしばらく会えなかったようである。

黄庭堅と張耒とはいつ黄州で会えたのか。黄庭堅の「次韻文潜」詩に、

武昌赤壁吊周郎、寒溪西山尋漫浪。
忽聞天上故人来、呼船凌江不待餉。
我瞻高明少吐氣、君亦歡喜失微恙。
年来鬼崇覆三豪、詞林根柢頗搖蕩。
天生大材竟何用、只与千古拌凶像。
張侯文章殊不病、歷險心膽原自壯。
汀洲源雁未安集、風雪牖戶当塞向。
有人出手弃茲事、正可隱幾窮諸妄。
經行東坡眠食地、拂拭宝墨生楚槍。
水清石見君所知、此是吾家秘密藏。

とあり、『任譜』の注は

二詩（「次韻文潜」と「和文潜舟中所題」のこと）并次前篇。時文潜以到黃。山谷自鄂往見之、前詩有「風雪牖戶当塞向」之句、蓋冬深所作。

とあるが、「汀洲源雁未安集」は雁の鳥が黄州に來たばかりでまた安らかに集まれない時期と解釈できる。今、黄州の周辺において、渡り鳥である雁の鳥が到來するのが大凡10月中旬から11月の間である⁶⁾。崇寧元年九月は西曆1012年10月14日から11月11日の間にあたり、上引く現代の雁の鳥の飛來の時期と齟齬はない。任淵

は二人対面の時期を「冬深」と解釈したが、「塞向墮戸」は冬を備える行事で、「冬深」と理解するには妥当ではないとおもう。

もし上述した「汀洲源雁未安集，風雪牖戸当塞向」は雁の鳥は飛来したがまた落ち着いていない冬の準備をする時令との解釈に間違いがなければ、黄庭堅と張耒と対面したのは崇寧元年九月中のことであろう。すなわち、「松風閣」詩はこの年の九月に創作された可能性が大きいとおもう。

『山谷詩別集』卷十四「与元中使君書」に、「頃至武昌，即居留，完其民屋，久之乃小完」，「自謀一舍，不敢求公家」とある。黄庭堅は鄂州で民家を借りて生活したことがわかる。又、「与元中使君書」に「某（黄庭堅）以避范德孺（范祖禹）法当遷居」の記載がある。范祖禹はほぼ同時期に鄂州に左遷され、このため、黄庭堅は当時の規定に法って引っ越しを考えたとわかる。つまり当時の「責降宮觀人」の間の繋がりや付き合いについて、できるだけ回避するルールがあり、同じ州に一緒に住むことが禁止されていた。この記録からの推論になるが、「責降宮觀人」の間の付き合いはそれほど自由ではないと考えられる。黄庭堅と張耒としばらく対面できなかった原因はこのルールのためであろう。このようなことを考え、黄庭堅と張耒との対面は恐らく九月の後半前後になるのではないかとおもう。言い換えれば、「松風閣」詩の創作は崇寧元年九月後半の某日という可能性が高いかもしれない。もし筆者の分析に誤りがあり、任淵の「蓋冬深所作」の解釈が正しければ、「松風閣」詩の創作日時はさらに幅を広げなければならない、つまり崇寧元年九月から十二月の間になる。いずれにしてもこのような考え方は「松風閣」詩が崇寧元年九月甲申の日（初二日）の夜に創作されたという考えより妥当であろう。

「松風閣」詩の句を互いに比較すれば、この詩が九月甲申の日（初二日）の夜に完成したものではないことがわかる。なぜなら、「松風閣」詩には翌日朝のことについて、

山川光輝為我妍，野僧早飢不能飽，

曉見寒溪有飲煙。東坡道人已沉泉，
張侯何時到眼前。釣台驚濤可昼眠，
怡亭看篆蛟龍纏。

と詠っていたのである。つまり、黄庭堅は鄂州西山の菩薩泉などで遊覧したあと、その日の夜は後に黄庭堅に「風松閣」と命名された建物のなかで宿泊し、そして翌日の朝は寒溪の炊煙を眺め、さらに釣台で昼寝をして怡亭を見学したのである。故に松風閣で泊まる夜はこの詩の構想をした可能性があるが、完成したのは後日になると考えられる。

Ⅲ 「夜闌箕斗插屋椽」について

「松風閣」詩にある「夜闌箕斗插屋椽」と「夜雨鳴廊到曉懸」の句も更に分析しなければならないとおもう。「夜闌箕斗插屋椽」は天象と関係する句である。まず「夜闌」は「夜明け前」・未明の意味で、管見によれば異なる解釈はなさそうである。黄宝華氏はここの「斗」を「箕斗，星の名前，二十八宿の中の箕宿と斗宿である」と解釈しているが⁷⁾、文学者の蔣勳氏はこの中の「斗」を「北斗七星」と解釈している⁸⁾、この二種類の解釈はいずれも表面的な解釈でディスクール（言説）のなかの明示的な意味（denotation）しか触れていないとおもう。

前近代の中国において、天文観測は史官の職掌である。史官職に勤める官僚は天文知識や暦の知識に精通する人が多い。黄庭堅は「黄太史」まで呼ばれる史官の経験者であり、彼の「二十八宿歌贈別無咎」及び表1⁹⁾にある黄庭堅の数多くの星宿関係の詩句からみれば、黄庭堅は一定の天文知識がある、表1に挙げている「金陵」の詩にある「青天行日月，坐看磨蟻旋」の句は天象の歳差に関する内容で、当時においてはかなり深い天文知識である¹⁰⁾。

又、「斗」と「箕斗」は黄庭堅に好まれる典故である。『山谷詩集』に収められている詩には箕斗併用の表現が使われた句が11カ所あり、「斗」が使われた句は40カ所あまりある。ここでまず黄庭堅の天象関係の句を表1のように纏めた

(仏教と関係する2句は取められていない)。また次節で蘇軾一門の詩人が使う「箕斗」・「箕昂」・「參斗」(箕斗併用の表現の変形とおもう)について分析したい。

1. この種の表現は明示的意味 (denotation) において天象を指すが、この詳細について次項で詳しく述べる。その例は、

依山築閣見平川，夜闌箕斗插屋椽。
である。

中国古典にある「斗」は北斗を表現する場合もあれば、斗宿(南斗)を表現する場合もあり、そして斗宿と北斗を併称する場合もある。たとえば、『三輔黄図』卷一に「城南為南斗形，北為北斗形，至今人呼漢京城為斗城是也。」とあり、漢の長安城は「斗城」と呼ばれるのはその城壁には斗宿を象徴する部分もあれば、北斗を象る部分もあるからである。『三輔黄図』卷一にあるこの「斗城」の「斗」は北斗と斗宿を合わせた呼び方で、かなり曖昧な表現だと考えられる。黄庭堅の「松風閣」詩にある「斗」もこのような不明瞭な表現ではないかとおもう。この詳細について次節で述べる。

2. 虚無を表現する

このような虚無を表現する句に使われる典故はおおよそ『詩』大東の「維南有箕，不可以簸揚。

維北有斗，不可以挹酒漿」からきたもので黄庭堅によく使われ、又は『古詩十九首』明月皎月光にある「南箕北有斗，牽牛不負軛」の句や『易』豊の象にある「豊其蔀位不當也，日中見斗，幽不明也」からきたのである。ただ朱熹は『詩集伝』でこの表現を「怨む」と解釈している。この類の典故が使われた例は次である。

但願崇事實，虚名等箕斗。(「用明発不寐有懷二人為韻寄李秉彝德叟」)

虚名无用处，北斗与南箕。(「次韻奉送公定」)

兒童報晦冥，正昼見箕斗。(「庚寅乙未猶泊大雷口」)

3. 離別を表現する。たとえば、

挾策讀書計糊口，故人南箕与北斗。(「再答明略二首(其一)」)

南箕与北斗，親友多離索。(「寄李次翁」)

南箕与北斗，日月行置郵。(「和答莘老見贈」)

南箕与北斗，磊磊貫纓絡。懷我隣邦友，賢義本不薄。箕斗常相望，江含霧冥漠。(「次韻答宗汝為初夏見寄」)

このほかに、前述したように仏教関係の詩に箕斗併用の表現が使われているが、それに関して本文の主旨と関係がないので省略したい。

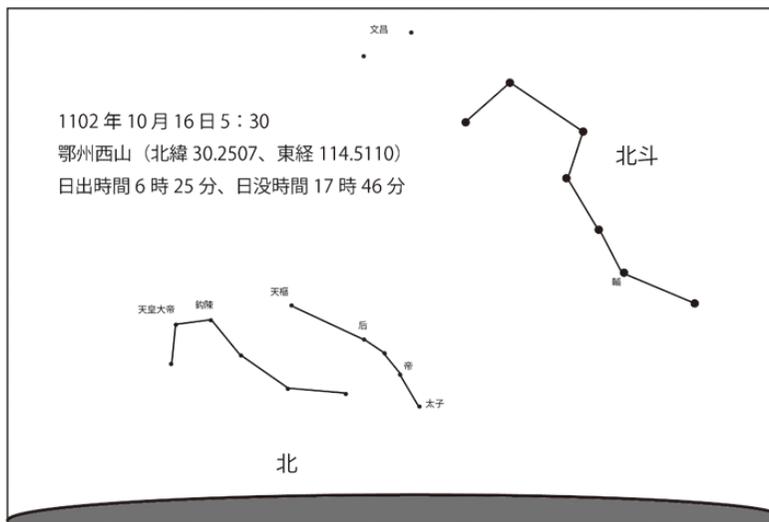


図1 1102年10月16日未明鄂州西山北方の星空

表1 黄庭堅の詩作にある星座

詩句	任淵注	題目	出処	備注
国好駿馬，尽為王良。	「尽為王良」言流俗之隨逐世好，不能特立獨行也。	贈別李次翁	『集注』卷第一	漢中四星，曰天駟。旁一星，曰王良。王良策馬，車騎滿野。〔史記〕卷七天官書
積潦干斗極，山河皆夜明。		次韻劉景文登鄧王臺見思五首（其三）	『集注』卷第一	北斗七星在太微北，七政之樞機。陰陽之元本也。故運乎天中，而臨制四方，以建四時，而均五行也。〔中略〕北極，北辰最尊者也。〔晉書〕卷十一天文志
有密深黃閣，光輝極上台。	『晉書』天文志，西近文昌二星曰上台。	王文恭公挽詞二首（其二）	『集注』卷第二	
日月麗宸極，大明朝万邦。		卧陶軒	『集注』卷第六	北極，北辰最尊者也。〔晉書〕卷十一天文志
河漢牛与女，咫尺不得語。	『文選』古詩云，迢迢牽牛星，皎皎河漢女。	次韵寄鬼以道	『集注』卷第六	
杜鵑無血可凝淚，何日金雞赦九州。	『關東風俗傳』云，司馬膺之曰，按『海中星占』，天雞星動為有赦，蓋王者以天雞為度。	予既作竹枝詞夜宿歌羅羅夢李白相見於山間曰予往謫夜郎於此聞杜鵑作竹枝詞三疊世傳之不予細憶集中無有請三誦乃得之	『集注』卷第十二	
山郭燈火稀，映天星漢少。		謫居黔南十首	『集注』卷第十二	
南極一星天九秋，自埋光景落江流。	按『晉書』天文志曰，老人一星在弧南，一曰南極，常以秋分之旦見于西，春分之夕而沒於了。	戲答王居士送文石	『集注』卷第十四	
依山築閣見平川，夜闌箕斗插屋椽。		武昌松風閣	『集注』卷第十七	
鍾鳴山川曉，露下星斗濕。		宿黃州觀音院鐘樓上	『集注』卷第十七	
雖為天上三辰次，未免人間五鼎烹。	陰陽家以井鬼之分為巨蟹宮。『左傳』曰，三辰旗昭其明也。	秋冬之間鄂渚給市無蟹今日偶得數枚吐沫相濡乃可憫笑戲成小詩三首（其一）	『集注』卷第十九	
掘獄無張雷，劍氣在牛斗。	『晉書』張華傳曰，牛斗之間常有紫氣。	晚泊長沙示秦處范元實用寄明略和父約五首（其一）	『集注』卷第十九	

詩句	史容注	題目	出処	備注
鳧飛葉縣郎官宰，虹貫江南處士星。	『晉』隱逸謝敷傳，初，月犯少微，少微一名處士星。	寄黃從善	『外集詩注』卷第一	
山銜斗柄三星沒，故人頗問不休官。	『詩』曰，三星在天。	衝雪宿新寒忽忽不寐	『外集詩注』卷第二	網緲東薪，三星在天。鄭氏箋曰，三星參也。亦解駁為心宿三星，河鼓三星。
人間鷄黍期，天上德星聚。	『世說新語』云，『晉陽秋』曰，陳仲弓從諸子造荀朗父子，於時德星聚。	次韵正仲三丈自衡山返命舍驛過外舅師厚贈答	『外集詩注』卷第二	
但願崇事矣，虛名等箕斗。	『詩』大東，維南有箕，不可以簸揚。維北有斗，不可以把酒漿。『文選詩』，南箕北有斗，牽牛不負軛，言彼三星若虛負軛，有其名。太白詩，北斗不酌酒，南箕空簸揚。	用明發不寐有懷二人為韻寄李秉彝德叟	『外集詩注』卷第三	
南山雲氣佳，北極冕旒遠。	『爾雅』，北極謂之北辰。	次韵謝外舅病不能拜夏夏雨眠起之作	『外集詩注』卷第三	
天津蠅河漢，闕角挂秋霓。	『爾雅』，析木謂之津也。箕，斗之間津也。注，漢津也，天漢之津梁。	次韵奉送公定	『外集詩注』卷第四	
虛名無用處，北斗与南箕。		次韵奉送公定	『外集詩注』卷第四	
永懷溟海量，北斗不可磨。	『詩』，維南有箕，不可以簸揚。維北有斗，不可以把酒漿。	寄南陽謝外舅	『外集詩注』卷第四	
卷幔天垂斗，披衣日在房。		和外舅夙興三首（其一）	『外集詩注』卷第四	
別離感寒暑，歲星行十二。	歲星十二歲一周天	賦未見君子憂心靡樂八韵寄李裁（其一）	『外集詩注』卷第五	
徒言參兩辰，未負石投水。	『揚子』，吾不顧參，辰之相比也。〔左傳〕昭元年子產曰，昔高辛氏有二子，伯曰閼伯，季曰實沈居于曠林，不相能也，日尋于戈以相征討，后帝不臧，遷閼伯於商丘，主辰，商人是以，故辰為商星。遷實沈于大夏，主參，唐人是因，以服事夏，商，故參為晉星。	賦未見君子憂心靡樂八韵寄李裁（其四）	『外集詩注』卷第五	
明明故人心，維斗終不移。		以同心之言其臭如蘭為韵寄李子先（其五）	『外集詩注』卷第五	
胸中壘块正須酒，東海可攬北斗斟。	『詩』曰，維北有斗，不可以把酒漿。	次韵答張沙河	『外集詩注』卷第六	
忽投雄篇寫逸興，仰占乾文動奎參。	『書斷』曰，蒼頡仰觀奎星圓合之勢，合而為字。〔孝搜神契〕云，奎主文章。詳見和「答莘老詩」注。奎，婁·胃·昂·畢·參，參與奎皆西方七宿，故云。	次韵答張沙河	『外集詩注』卷第六	
匏瓜豈無匹，自古同心難。	『洛神賦』，歎匏瓜之無匹，詠牽牛之獨處。注云，『史記』曰，四星在危南，匏瓜，牽牛為犧牲，其北織女。	八首歌贈晁堯民	『外集詩注』卷第六	
吾聞向來得道人，終古不忒如維斗。	『莊子』大宗師，維斗得之，終古不忒。	走答明略適堯民來相約奉調故篇未及之	『外集詩注』卷第六	
挾策讀書計闕口，故人南箕与北斗。	『詩』，維北有斗，不可以把酒漿。言離別。	再答明略二首（其一）	『外集詩注』卷第六	
執攬北斗柄，斟酌四時和。	『漢』天文志，北斗建四時。	定交詩二首效鮑明遠体呈晁無咎（其二）	『外集詩注』卷第六	

山谷詩外集注	衛平矇口無南箕，斗柄指日江使噫。	〔史記〕 龟策伝、江使神象於河、至於泉陽、漁者豫且得之。龟見夢於宋元王曰、「我為江使、而豫且得我。」元王召博士衛平而問之、平曰、「南風新至、江使先來、斗柄指日、使者當囚。」退之詩、我生之辰、月宿南斗。牛奮其角、箕張其口。言衛平張口如箕也。	二十八宿歌贈別無咎	〔外集詩注〕 卷第六	
	維斗天司南，其下百瀆傾。	〔莊子〕 維斗得之、終古不忒。〔漢〕 天文志、斗為帝車、古有司南車也。	外舅孫莘老守蘇州留詩斗野亭庚申十月庭堅和	〔外集詩注〕 卷第八	
	風吹落塵網，歲星奔回旋。	歲星十二年一周天	十月十三日泊舟白沙江口	〔外集詩注〕 卷第八	
	青天行日月，坐看磨蟻旋。	〔晉〕 天文志、日月實東行、而天牽之以西沒。如蟻行磨石之上、磨左旋而蟻右行。	金陵	〔外集詩注〕 卷第八	
	商人萬斛船，掛席上牛斗。		大雷口阻風	〔外集詩注〕 卷第八	
	兒童報曉冥，正昼見箕斗。	〔易〕 豐之九三、日中見斗。	庚寅乙未猶泊大雷口	〔外集詩注〕 卷第八	按〔國史〕、元豐三年十二月己丑朔、庚寅、蓋初二日也。
	為我書斯文，要與斗牛垂。		龜泉泉上	〔外集詩注〕 卷第八	
	北辰九閏隔雲雨，南極一星在江湖。	〔爾雅〕、北極謂之北辰。〔九閏〕 見楚辭。杜詩、南極一星朝北斗。	題落星寺四首（其二）	〔外集詩注〕 卷第八	
	鯨鯢蟻蠱但痴坐，夜寒南北斗垂天。		題落星寺四首（其四）	〔外集詩注〕 卷第八	
	投策數去日，木行天再環。	〔尚書考靈輿〕 云、歲星、木精也。歲星十二年一周天。	過致政屯田劉公隱廬	〔外集詩注〕 卷第九	
	廬山秀出南斗傍，登高送遠形神開。		寿聖觀道士黃至明開小隱軒太守徐公為題日快軒庭堅集句詠之	〔外集詩注〕 卷第九	
	氣與神兵上斗牛，詩如晴雪濯江漢。	並見上	次韻和答孔毅甫	〔外集詩注〕 卷第十	
	斗柄垂天霜雨空，獨雁叫群雲万重。		再用舊韻寄孔毅甫	〔外集詩注〕 卷第十	
	南箕与北斗，親友多離索。	集中有詩云、故人南箕与北斗。言別離也。	寄李次翁	〔外集詩注〕 卷第十一	
	劍埋豐城獄，氣与牛斗平。	見上	和答魏道輔寄懷十首（其四）	〔外集詩注〕 卷第十一	
	事如飛鴻去，名與南斗偕。	狄仁傑曰、北斗以南、一人而已。	次韻周法曹遊青原山寺	〔外集詩注〕 卷第十一	
	佳人斗南北，美酒玉東西。	集中有詩云、故人南箕与北斗。言別離也。	次韻吉老十小詩（其六）	〔外集詩注〕 卷第十三	
	室中餘一劍，無氣斗牛間。	見上	次韻吉老十小詩（其十）	〔外集詩注〕 卷第十三	
	呼船久無人，月沈河漢傾。	杜詩曰：七星在北戶，河漢聲西流。	次韻知命永和道中	〔外集詩注〕 卷第十三	
	別來星環天，再見艷桃李。	〔左傳〕 襄九年、是謂一終、一星終也。注、歲星十二歲一周天。	寄徐干徐隱甫	〔外集詩注〕 卷第十三	
文星台在天東壁，清都紫微醉雲霓。	杜詩、北斗避文星。〔晉〕 天文志、東壁二星、主文章、天子圖書之祕府也。	別蔣穎叔	〔外集詩注〕 卷第十四		
南箕与北斗，日月行置郵。		和答莘老見贈	〔外集詩注〕 卷第十五		
文昌八座鄰樞極，天上歸來愧不如。	唐劉泊疏云、八座比於文昌。六曹尚書及令僕為八座、見〔晉〕 職官志。	与李公擇道中見兩客布衣班荆而坐對戲弈秋因	〔外集詩注〕 卷第十五		
披拂龍紋射斗牛，外家英豎似張雷。	謂張華、雷煥。	以謫公所惠揀芽送公擇次旧引韻	〔外集詩注〕 卷第十五		
玉鈴金印臨參井，控蜀通秦四十州。	太白〔蜀道難〕 云、捫參歷井仰歌息。	送高士敦赴成都鈔轄二首（其一）	〔外集詩注〕 卷第十六	參為蜀分野、井為秦分野。〔東坡集〕 中亦有此詩。	
摩圍山色醉今朝，試問扁程指斗杓。		送曹黔南口號	〔外集詩注〕 卷第十七		
定知詩客來，夜虹貫斗牛。	白虹貫日、見〔鄒陽傳〕。	再作答徐天隱	〔外集詩注〕 卷第十七		
何似乾明能效古，渠知北斗裏藏身。	〔傳燈錄〕 慧清禪師伝、僧問、「北斗裏藏身、意旨如何。」師曰、「九九八十一。」	贈花光老	〔外集詩注〕 卷第十七		
山谷詩別集注	詩句	史季温注	題目	出處	備注
	日月行當壽星紀，仙人初出闔風時。	〔尚書釋文〕 堯典云、日月所會者、謂日月交會於十二次、辰日壽星、丑日星紀。	酌姚崇德君壽酒	〔別集詩注〕 卷上	
	此道沈霾多歷年，喜君占斗斷龍泉。	〔晉〕 天文志曰、老人一星在弧南、一曰南極、常以秋分之旦見於丙、春分之夕沒於丁。見則治平、主壽昌。	戲用題元上人此君軒詩韻奉答周彥起予之作	〔別集詩注〕 卷下	
玉座天開旋北斗，清班鳥散落餘花。	孤獨及〔風后八陣圖記〕、「若星馳天旋、雷動山破。」時徽廟登極、故有「玉座天開」之句。	和蒲泰亭四首（其三）	〔別集詩注〕 卷下		
山谷詩外集補	詩句		題目	出處	備注
	因時有更張，斟酌如斗柄。		擬君子法天運	〔外集補〕 卷第一	
	虛名織女星，不能成文章。		行行重行行贈別李之儀	〔外集補〕 卷第一	
	人生此歡良獨難，夜如何其看斗柄。		和世弼中秋月詠懷	〔外集補〕 卷第二	
	世事寒暑耳，四時旋斗杓。		次韻答常甫世弼二君不秋利官鬱鬱初不平故予詩多及君子處得失事	〔外集補〕 卷第二	
	參旗斗柄略欄檻，清坐耳聞河漢風。		題虔州東禪圓照師新作御書閣	〔外集補〕 卷第二	
	南箕与北斗，磊磊貫纒絡。懷我隣邦友，賢義本不薄。箕斗常相望，江含霧冥漠。		次韻答宗汝為初夏見寄	〔外集補〕 卷第二	
人家半夢中，占斗辨西東。		早行	〔外集補〕 卷第三	唐人許渾詩	
南極一星淮上老，承家令子氣橫秋。		再和寄靈六	〔外集補〕 卷第四		
其他					
	鼻孔隨人走，日中忽見斗。		以皮鞞底贈石推官三首（其三）	〔山谷詩別集補〕	

では、「依山築閣見平川，夜闌箕斗插屋椽」にある「斗」はどの星座を指しているであろうか。前引く黄宝華氏の見解によれば，ここの「斗」は斗宿（南斗）であり，これは一般的な考えである。なぜなら，箕宿と斗宿の間隔は少なく，一目で二つの星座を眺めることができる。北斗は基本的に箕宿の正反対の方位に位置し，一目で箕宿と北斗を見ることができないだけでなく，この二つの星座が同時に建物の軒（屋椽）に位置することは極めて稀の現象に違いない。しかし，これは感覚的な推測に過ぎない。以下，時間・地形・天象からこの問題を分析し，次節でディスクール（言説）の視角からこの問題を分析したい。

風松閣が所在する武昌西山の山頂は海拔170メートル前後になる。山頂から麓の中腹まではおおよそ400メートル前後である。その西側には抔湖を隔てほかの峰がある。そして1102年10月（旧暦九月）5時30分の場合，北斗七星の輔星の高度は28°前後，九月中北斗七星にもっとも高く昇る天璇の高度は48°前後になる。このような高度であれば，西山の山頂が高いため，西山の南の中腹地帯に位置する風松閣から北斗の全体が見えなく，天璇しか見えない可能性が高いが，天璇の高度は48°前後なので，建物

の軒付近に山の影が見え，その更に上に北斗があり，北斗が山に挿す景観はありえるが，「屋椽」に挿すという景観にならないかもしれない。

では，崇寧元年九月の某日の夜明け前に，西山の南麓から箕宿と斗宿が見えたのであろうか。表2と図2によれば¹¹⁾，西暦1102年10月16日の鄂州西山の日出の時間は6時25分であり，「夜闌」，つまり夜明け前の時はおおよそ5時前後であろう。表2からみれば，箕宿の中星の出没時間は出10時39分・没20時14分であり，斗宿（南斗）の中星の出没時間は出11時12分，没21時3分である。当日5時半前後，箕宿中星の方位は276.6°，高度は-63.67°であり，斗宿中星の方位は265.35°で，高度は-72.04°である。つまり，当日未明の時，箕宿と斗宿はいずれも前日の20時ごろから地平線の下に位置し，完全に見えないはずである。「夜闌」の時間を拡大解釈しても「箕斗」が見えない。つまり，「松風閣」詩に書いている天象は実際の天象と異なっているのである（図2参照）。

より時間の範囲を広げたら箕宿と斗宿が見えるのであろうか。表2で示しているように，西暦1103年2月（約崇寧二年一月）から1103年3月（約崇寧二年二月）まで，「夜闌」の時，西山の南東方向から箕宿と斗宿がみえるが，この時期

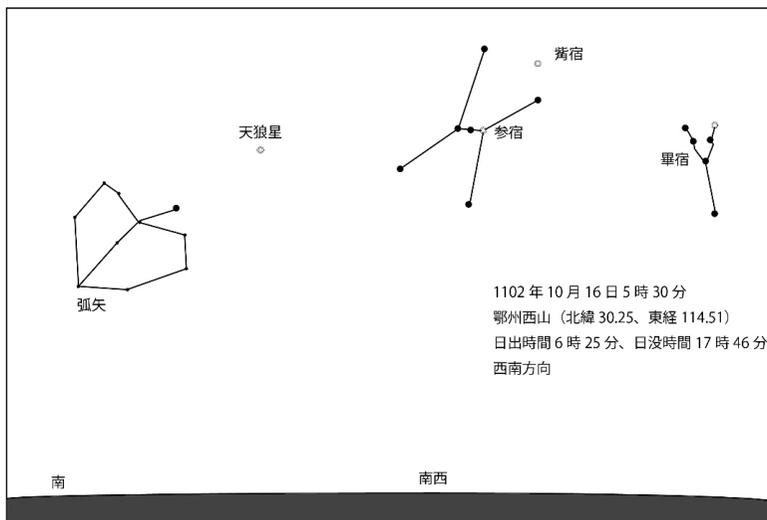


図2 1102年10月16日未明鄂州西山南方の星空

表2 崇寧二年秋冬鄂州における箕宿・斗宿・北斗の出没状況

1102年10月(約崇寧元年九月)				1102年11月(約崇寧元年十月)			
16日 5:30	日出 6:25 日中 12:06 日落 17:46			16日 5:30	日出 06:51 日中 12:08 日落 17:26		
	箕宿中星	方位	高度		箕宿中星	方位	高度
		276.6°	-63.67°			286.00°	-37.83°
		出	没			出	没
		10:39	20:14			08:37	18:12
	斗宿中星	方位	高度		斗宿中星	方位	高度
		265.35°	-72.04°			279.30°	-45.74°
		出	没			出	没
		11:12	21:03			9:11	19:01
	北斗輔星	方位	高度		北斗輔星	方位	高度
		214.92°	28.91°			214.33°	44.15°
		出	没			出	没
	--:--	--:--		--:--	--:--		
1102年12月(約崇寧元年十一月)				1103年1月(約崇寧元年十二月)			
16日 5:30	日出 07:13 日中 12:21 日落 17:30			16日 5:30	日出 07:15 日中 12:34 日落 17:53		
	箕宿中星	方位	高度		箕宿中星	方位	高度
		296.65°	-14.11°			311.58°	7.91°
		出	没			出	没
		6:40	16:14			4:38	14:12
	斗宿中星	方位	高度		斗宿中星	方位	高度
		290.18°	-21.12°			303.93°	2.62°
		出	没			出	没
		7:13	17:03			5:11	15:01
	北斗輔星	方位	高度		北斗輔星	方位	高度
		201.72°	56.61°			173.15°	60.35°
		出	没			出	没
	--:--	--:--		--:--	--:--		
1103年2月(約崇寧二年一月)				1103年3月(約崇寧二年二月)			
16日 5:30	日出 07:15 日中 12:34 日落 17:53			16日 5:30	日出 07:15 日中 12:34 日落 17:53		
	箕宿中星	方位	高度		箕宿中星	方位	高度
		311.58°	7.91°			359.42°	29.72°
		出	没			出	没
		4:38	14:12			0:46	10:20
	斗宿中星	方位	高度		斗宿中星	方位	高度
		323.59°	21.57°			348.734°	31.31°
		出	没			出	没
		3:09	12:59			1:19	11:09
	北斗輔星	方位	高度		北斗輔星	方位	高度
		150.59°	51.568°			144.35°	38.47°
		出	没			出	没
	--:--	--:--		--:--	--:--		

はずで春季に入った。しかし前述したように崇寧元年冬のとき、黄庭堅がすでに張耒と対面していたので、崇寧二年春であれば「松風閣」詩にある「張侯何時到眼前」の記録と合わないのである。つまり、「夜闌箕斗插屋椽」というのは文学的な創作で、当時の実際の景観ではないことになる。

実は、「松風閣」詩のなかにすでに「夜闌箕斗插屋椽」の景観が文学的な創作であることを示す手掛かりがある。「松風閣」詩には「夜雨鳴廊到曉懸」の句があり、黄庭堅は松風閣で宿泊した夜、雨は夜明けまで降り続いていた。「山川光輝為我妍，野僧早飢不能饘，曉見寒溪有飲煙」が示したように、朝になって晴れになったのである。このように、「松風閣」詩の内文の互校から見ても、当日の天象・地形・時間の検討から見ても、当時、鄂州西山で「松風閣」詩に載せている星座はほとんど見えないのである。言い換えれば、黄庭堅が詠う「箕斗」は現実的なものではない、黄庭堅はこの詩の創作をするときにははっきり「斗」は北斗と斗宿（南斗）のどちらかについて、意識していないはずである。これは史学者に戸惑いをもたらす結論になるが、Cultural theoryの観点からみれば、むしろ一理ある結論になるかもしれない。これに関して次節で詳細に分析したい。

Ⅳ 政治集団としての蘇軾一門の詩人の作品における箕斗併用表現の意義

歴史は過去に起きた事件の記述である。しかし、過去のテキストに含まれた文学的な創作（虚構）は過去の実体性に対する認識を歪曲する恐れがあると、史学者たちが危惧している¹²⁾。しかし、このような前近代のテキストにある文学的虚構の要素及び史学者のこのような恐れに対して、Roland Barthes氏は、このような歴史的な記述がそもそも虚構的な材料（たとえば神話と詩）に基づいて語られたものであるが、最終的に「実在の証拠と記号」になっている

表3 『全宋詩』における箕宿表現の使用状況

蘇軾一門と関係者		その他	
氏名	使用回数	氏名	使用回数
黄庭堅	11	梅堯臣	7
蘇軾	6	王令	2
蘇轍	3	范成大	2
晁補之	3	王安石	1
賀鑄	2	王禹偁	1
鄧忠臣	1	陸游	1
張耒	1		
蘇洵	1		
晁説之	1		

と指摘し、さらにRoland Barthes氏は史学者が単に受身的に過去の実在を掘り出すべきではない、逆に積極的にそのディスクール（言説）の効果を再構築すべきだと述べ、「事実」と「意義」の間の弁明と分析に着目すべきだと考えている¹³⁾。筆者も黄庭堅の「松風閣」詩についても、Roland Barthes氏の考え方で理解するほうがよりその深意がわかるのではないかとおもう。

「斗」の単独使用は宋代の詩人の作品によく見られるが、「箕」は宋代の詩人たちによく使われる言葉ではないようであり、『全宋詩』に星宿の「箕」が使われた詩は43作品しかない¹⁴⁾。しかし、表3で示したように、蘇軾一門の詩人は星宿の「箕」を愛用し、特に蘇軾と黄庭堅がよくこれを使っている。表4は蘇軾一門の詩人が星宿の「箕」を使って詠った句である。これで蘇軾一門の詩人はその詩詞の唱和応酬において、「箕斗」はよく使われる言葉だとわかる。その変形は「參斗」・「南箕与北斗」などの形があり、また「箕昂」・「箕尾」のような類似的表現もある（以下「箕斗併用表現」と略称する、「斗」だけが使われる場合は別の意義を表現する記号になるとおもう）、表3から箕斗併用表現は蘇軾とその門人の特有の記号（sign）と理解していいのではないかとおもう。黄庭堅は一人の詩人としての詩にある箕斗併用の表現は前項で述べられたが、政治団体である蘇軾一門の記号（sign）として、箕斗併用表現の明示的意味（denotation）の

うらにはどのような言外の意味 (connotation) を有するのか。

表 4 からみれば、箕斗併用表現の明示的意味 (denotation) はもちろん天象であるが、その言外的意味 (connotation) は離別・死別の意味をもち、特に「箕尾」の表現は基本的に挽歌に使われている (たとえば「又騎箕尾去、朝野涕空揮」・「聞道騎箕尾、還応事玉宸」)。

箕斗併用表現という記号 (sign) は蘇軾一門

の詩人において、時に虚無や憂愁を表現する記号でもある (たとえば虚無を表現する例には「可使簸揚挹酒漿、不似箕斗名虚張」などがあり、憂愁を表現する例には「箕畢靡遑舍、巢穴徒更讐」などがある)。

さらに、蘇軾一門においては、箕斗併用表現は大きな川・海ないし万里の長城による地理的分断を嘆く記号 (sign) である。たとえば「参横斗転欲三更、苦雨終風也解晴」・「中開哆箕畢、

表 4 蘇軾一門の詩人の箕斗併用表現の使用状況

著者	詩句	詩題
蘇軾	南箕与北斗，乃是家人器。	夜行觀星
	喧阗瞬息間，還掛斗与箕。	出都來陳，所乘船上有題小詩八首不知何人有感於余心者聊為和之 (其六)
	死後人伝戒定慧，生時宿直斗牛箕。	贈慶州術士謝晋臣
	星騎箕簸揚糠粃，斗掌權衡表漢桓。	次韻借觀睢陽老五囚
蘇轍	中開哆箕畢，末路牽一線。	奉使契丹二十八首 (之七燕山)
	聞道騎箕尾，還応事玉宸。	贈司空張公安道挽詞三首 (之二)
	窃脂未嘗穀，南箕儼微似。	登南城有感示文務光王通秀才
黄庭堅	依山築閣見平川，夜闌箕斗插屋椽。	武昌松風閣
	但願崇事實，虚名等箕斗。	用明發不寐有懷二人為韻寄李秉彝德叟
	虚名无用处，北斗与南箕。	次韻奉送公定
	挾策讀書計糊口，故人南箕与北斗。	再答明略二首 (其一)
	衛平哆口無南箕，斗柄指日江使噫。	二十八宿歌贈別無咎
	兒童報晦冥，正昼見箕斗。	庚寅乙未猶泊大雷口
	南箕与北斗，親友多離索。	寄李次翁
	南箕与北斗，日月行置郵。	和答莘老見贈
	南箕与北斗，磊磊貫纒絡。	次韻答宗汝為初夏見寄
	如來利利与塵塵，北斗南南箕透法身。	和程德裕頌五首 (之四)
須弥說法大海聽，南箕吹折北斗柄。	和朱宏夫真妄頌	
秦觀	又騎箕尾去，朝野涕空揮。	中書侍郎挽詞二首 (之一)
張耒	耿耿千里心，箕昂互相望。	感春十三首 (之七)
晁補之	龜出仰喙魚張腮，南箕不哆少女默。	同楊希仲吳子進李希孝張景良北闕納涼晚過大安寺
	長鬚春米婢借箕，斗酒為君聊解頤。	二十八舍歌
	無言遍数天河星，只有南箕近鄰邑。	芳儀怨
晁說之	箕畢靡遑舍，巢穴徒更讐。	今年暑氣甚劇六月二十八日初伏之末風雨甚橫既而便晴有感作
賀鑄	舟師望箕宿，緜幔須明發。	送周壽元翁西上丙子七月賦余時臥病漢陽
	維漢南有箕，垂象列三辰。	和錢德循古意二首 (之二)
鄧忠臣	可使簸揚挹酒漿，不似箕斗名虚張。	敬次無咎來韻抒写素懷兼呈文潛天啓伯時仲遠

末路牽一線」・「喧豨瞬息間，還掛斗与箕」などがある。

このような表現は宋代の他の詩人の詩にもあるが、出現の頻度は低い。そして、蘇軾一門の詩人は詩という形の作品で箕斗併用表現を使うが、詞などの作品にはほとんど使われていないことも強調したい。

最後、蘇軾の「六月二十日夜渡海」と黄庭堅の「松風閣」詩と比較して、黄庭堅の「松風閣」詩にある「夜闌箕斗插屋椽」の言外的意味 (connotation) を再確認したい。「六月二十日夜渡海」の内容は次のようである。

参横斗転欲三更，苦雨終風也解晴。
雲散月明誰点綴，天容海色本澄清。
空餘魯叟乘桴意，粗識軒轅奏樂声。
九死南荒吾不恨，茲游奇絶冠平生¹⁵⁾。

この詩は紹聖四年六月十二日 (1097年7月23日) の作とされているが、創作時間について、六月二十日 (1097年7月31日) や九月二十日 (1097年10月27日) など諸説があるが、黄庭堅の「松風閣」詩と同じく、いずれの時間にしても実際の天象と合わない。そして蘇軾は建中靖国元年七月二十八日 (1101年8月24日) に首都に召還された途中で病死した。一方、黄庭堅は崇寧元年九月中 (もしくは秋の某日) 「松風閣」詩を作った。その翌年に宜州 (今広西宜山県) に流され、崇寧四年九月三十日 (1105年11月8日) に亡くなった。

また、言葉には、明示の意味 (denotation) と言外的意味 (connotation) より深い第三レベルの意義、つまりイデオロギー的意義が存在している。蘇軾一門によく使われる箕斗併用表現のイデオロギー的意義はなんだろうか。これについても詳しく解析すべきであるが、筆者にはそこまでの分析力が足りなく、有識者の解説を俟つかない。しかし、中国古代は北極星が皇帝の象徴であり、北斗は帝車とされて皇帝に使われるものになる。その南にあるのは二十八宿で、特に箕宿の一部は天の川の南側にある。このエリアの天の川はもっとも広くて明るい、条件のいい場所であれば肉眼でも確認できる。

中国の「牛郎織女伝説」や日本の「七夕伝説」に語られたように、この部分の天の川は分断の事実と再会の希望を表現する記号 (sign) である。箕斗併用表現は、北極星・北斗——天の川——箕宿という天象の表現を使って、皇帝・大臣——長江や海のような地理的な分割——「責降宮観人」などの追放役人 (場合によって異民族への使者) の権力者集団内部構図を隠し、蘇軾の「九死南荒吾不恨」が詠ったように、この支配的秩序に対する順従を示すイデオロギー的な意義があるかもしれない。

おわりに

Roland Barthes は The discourse of history で「事実」という名義による保護のもとに、われわれが史詩・小説・演劇のなかから発見した想像的ディスクール (言説) と「事実」を重視する歴史的ディスクール (言説) の間に、どのぐらいの違いがあるのであろうかとの質問をした¹⁶⁾。ポスト構造主義の考えの中で、優位性のある解説は存在しない。黄庭堅の「松風閣」詩を理解するには、「事実」を重視する解説は理解の基礎だとおもう。そして「事実」に合わないということはこの作品の深いところに潜めている意義を否定すべきではない。史官経験者の都市に関する文学作品に対しても、「事実」を確認した上の更なる発掘を行ったら、前近代社会の都市の様々な側面を発見できるのではないかとおもう。

注

- 1) 侯艶如「黄庭堅「松風閣詩卷」通藏考略」、『大観 (論壇)』2018年第1期、呉宗超「「松風閣詩卷」流伝考述」、『芸術市場』2014年第1期。
- 2) 黄宝華「黄庭堅詩詞文選評」, 上海: 上海古籍出版社, 2003年12月, 149ページ。周承水・周文彧「黄庭堅与西山松風閣」, 『江南風』2017年第3期など。
- 3) 鄭永曉「黄庭堅年譜新編」, 北京: 社会科学文献出版社, 1997年12月, 518ページ。楚默「松風閣詩卷」研究」, 『中国書法』2015年第2期、劉琰・楊曉萍「黄庭堅和「松風閣詩卷」」, 『中国書法』2015年第2期。

- 4) 台湾中央研究院『二千年中西曆轉換』<https://sinocal.sinica.edu.tw/> (閲覧日: 2022年10月1日23時)。
- 5) 同上, 鄭永暁『黄庭堅年譜新編』, 378ページ。
- 6) 『湖北日報』2018年8月30日「秋風起兮雁南飛, 雁南飛兮黄蕩湖」https://www.cnr.cn/hubei/jiaodian/20180830/t20180830_524345882.shtml (閲覧日: 2022年5月20日20時)。
- 7) 同上, 黄宝華『黄庭堅詩詞文選評』, 149ページ。
- 8) 蒋勳『蒋勳老師講黄庭堅「松風閣」(上)』<https://www.bilibili.com/video/BV1pE4119781/> (07:21, 閲覧日: 2022年10月1日21時30分)。
- 9) 黄宝華點校『山谷詩集注』, 上海: 上海古籍出版社, 2003年より筆者が作成。
- 10) その注に, 「『晋』天文志, 日月実東行, 而天牽之以西没。如蟻行磨石之上, 磨左旋而蟻右行」とある。
- 11) 図1・図2と表2はいずれもAstroArts社StellaNabigatorで作成するものである。
- 12) Simon Gnn *History and Culture Theory*, UK: Pearson Education Limited, 2006, 26ページ。
- 13) Roland Barthes *The discourse of history*. 『歴史的話語 現代西方歴史哲学訳文集』, 桂林: 広西師範大学出版社, 2002年, 110-141ページより引用。
- 14) 元智大學『宋詩』データベース, <http://cls.lib.ntu.edu.tw/QSS/home.htm> (閲覧日: 2022年9月25日17時)。
- 15) 『蘇軾詩集合注』, 上海: 上海古籍出版社, 2001年, 二二一八頁。この詩は紹聖四年六月十二日(1097年7月23日), 六月二十日(1097年7月31日), 九月二十日(1097年10月27日)など諸説がある。夏の三更はおおよそ夜十一時から翌日の零時三十分前後である。紹正四年六月の夜0時ごろに横になっている参宿が見えないはずであるが, 3時頃であれば雷州半島の南端の東南東方向にみえる。この年の九月であれば, 0時前後に雷州半島の南端の東南東方向で横向きの参宿がみえる。
- 16) 上引『歴史的話語 現代西方歴史哲学訳文集』110ページでは「譬如说, 在把诗的和小说的话语, 把虚构的和历史的叙述加以对比时, 我们是否总是有道理的呢? (中略) 我们可以把适合于叙述历史事件的方式 (一个在我们的文化传统中从属于历史“科学”规范的问题, 它要求符合“实际发生的事情”这样的准则, 并根据合理的说明原则来加以判断) 与适合于史诗, 小说或戏剧的方式加以区别吗?」と訳されている。

(2022年11月18日掲載決定)